

英 語 科

天野 紳一・松村 健・赤松 猛

I 研究の経緯

1 昨年度までの研究

昨年度の実践は、文法や語彙の理解に焦点を当てた指導とフォニックスを活用した音声指導に分けることができる。それぞれの指導内容は表 1 の通りである。

表 1 昨年度の指導内容（概要）

Ⅱ 期前期	Ⅱ 期後期	Ⅲ 期
・ 英語表現の繰り返し練習 【聞く・話す】 ・ 歌の歌詞や辞書を用いながら会話につなげる指導【話す・読む】	・ 英語表現の繰り返し練習 【聞く・話す】 ・ 英語表現の構造や機能の理解に関する指導 【読む】	・ 英語表現の繰り返し練習 【聞く・話す】 ・ 状況に応じた表現の選択を促す指導 【話す・書く】 ・ 状況をとらえた文章の適切な理解に関する指導 【読む】
・ フォニックスでアルファベット 1 ～ 3 文字程度の指導 【読む】	・ フォニックスでの音の足し算の指導 【読む・書く】	・ Rhyming（韻）の要素を取り入れたフォニックスでの音声指導 【読む・書く】

※Ⅱ期後期では、「状況に応じた表現の選択」や「状況を捉えた文章の適切な理解」を促す活動を全く行わないということではなく、教師からの発問、説明や助言の量がⅢ期と比べて多いことを示す。

指導実践から明らかになったことを以下に示す。

（１）文法や語彙の理解に焦点を当てた指導

①Ⅱ期後期（中学１年生）

- ・ 従来の PPP アプローチと Focus on Form アプローチを融合した指導を通して、言語（昨年度は現在進行形）の機能について、対象生徒の半数が理解できていたが、課題として２度、３度とスパイラルな指導が必要であることが分かった。

②Ⅲ期（中学２年生）

- ・ 既習事項の使用方法や機能を復習として取り入れることで、新出文法（昨年度は there 構文）の機能を理解させる指導を通して、対象生徒の半数がその機能について理解を深めることができたが、there 構文に関する機能を活かした表現までには至っておらず、Ⅱ期後期と同様に、スパイラルな指導が必要であることが分かった。

（２）フォニックスを活用した音声指導

- ・ フォニックス指導に対して、各段階において児童生徒から６割以上が好意的にとらえており、音声指導を求めていることが分かった。
- ・ Ⅱ期前期においては、アルファベット 1 文字から例外のない 3 文字程度の音声指導までが児童にとって負担も少なく、興味を持って学習できる範囲であることが分かった。また、フォニックス導入時にはジェスチャーを用いる Zoo phonics を活用した。音声と文字を導入する際には、Zoo phonics を併用しながら指導すると、児童の気づきにスムーズにつながり、Zoo phonics を併用しながら、文字と音のつながりへの理解を進めることができた。
- ・ Ⅱ期後期においては、英語で特徴的なフォニックス (th, sh, ch, ck, wh, magic-e など)、母音同士のフォニックス (oa, oo, ee など)、母音と子音のフォニックス (er, ar, ew など) をビンゴシートを用いて、音読筆写する音声指導を１年間継続して実施することで、未習語の音を推測して読

むことができるようになることが分かった。

- ・Ⅲ期においては、Rhyming（韻）の要素を取り入れたフォニックス学習材を用いて指導すれば、生徒の学習への意欲が高まるだけでなく、フォニックスの体系的知識を活用して英文を読むことにつながるということが分かった。

以上のように、文法や語彙の理解に焦点を当てた指導においては、それぞれの段階で一定の成果を得ることができた。しかしその一方で、昨年度で言えば、進行形と **there** 構文といったように取り上げる文法事項の違いがあったり、**Focus on Form** アプローチと既習文法と未習文法の関係を読み取らせていくといった指導方法の差異等があったりしたため、各段階の学びのつながりについては見えにくいという課題も明らかになった。フォニックスを活用した音声指導においては、各段階で児童生徒の実態に応じた指導を試みてきたが、各段階における系統性については課題が残る。そこで、今年度の研究では、学びのつながりをより分かりやすくする工夫をすることとした。

2 今年度の研究

今年度の研究も引き続き、小中5年間のつながりを意識して、文法や語彙の理解に焦点を当てた指導とフォニックスを活用した音声指導をすすめる。

（1）文法や語彙の理解に焦点を当てた指導

今年度は、小中で取り上げられる「道案内」に焦点をあて、Ⅱ期前期からⅢ期の学びがつながる授業の在り方を探る。道案内で取り上げられる文法事項は主に命令文と助動詞である。各段階において共通で取り上げられるのが命令文である。命令文の基本的な形は動詞を文頭におくことである。Ⅱ期前期では、それに加えて **Let's** を用いた命令文も取り扱う。Ⅱ期後期では、Ⅱ期前期と同様の表現を基本とした道案内となる。さらにⅢ期では、バスの停留所や電車の乗り継ぎにおける道案内まで内容が発展していくため、**take** を用いた表現を取りあげている。以上のように、道案内を通して、命令文の様々な形を学ぶことができるだけでなく、様々な場面における道案内を取りあげることで、表現の取捨選択から、言語の機能まで深く学習できる題材であると言える。また、助動詞も頻繁に取り上げられる題材である。助動詞については、Ⅱ期で **can** を、Ⅲ期で **will, may, should, would, could** など多数を取り上げることとなる。道案内を通して、その状況における助動詞の使用方法や言語の働きについて学習できると考える。これらのことを踏まえて、各段階における到達目標を以下のように示す。

表2 道案内の指導における到達目標

期	Stage	到達目標
Ⅱ期前期	Stage 1	・ Turn left/right. Go straight. Stop.など道案内で使用する表現を知る。 ・ 命令文や助動詞が道案内で 사용할 ことができることを知る ・ 命令文や助動詞、非言語（ジェスチャーなど）を用いて、道案内をしようとしている。
Ⅱ期後期	Stage 2	・ Turn left/right. Go down this street.等道案内で使用する表現を知り、それらを使用しようとしている。 ・ 命令文の体系的知識（動詞を文頭に置いて文を始めること、否定については Don't を文頭に持ってくる こと、提案するときには Let's を用いること）を知る。 ・ 命令文には命令だけでなく依頼のニュアンスがあることを知る。 ・ 助動詞 can の体系的知識（「能力」「許可」「可能性」の意味を含むこと、助動詞に続く動詞は原形であること、疑問文の際は文頭に置くこと、否定文のときには not とともに使うこと）を知る。 ・ 平易な英文（主に命令文）を用いて、道案内をすることができる。

Ⅲ期	Stage 3	- Which bus goes to...?, Take Bus No.3., Where should I get on/off?, How long does it take?など道案内（乗り物）で使用する表現を知る。 - 命令文や道案内（乗り物）で用いられる表現を状況に応じて使用することができる。 - 助動詞 should の体系的知識を知る。
	Stage 4	- Could you tell me how to get to...?, Take the ...Line to..., and change trains there. How many stops is ... from ...?, Which line should I take from...?など道案内（乗り物）で使用する表現を知る。 - 命令文や道案内（乗り物）で用いられる表現を状況に応じて適切に使用することができる。 - 助動詞 could の体系的知識を知るとともに、助動詞の過去形に含まれるニュアンスを知る。

（２）フォニックスを活用した音声指導

フォニックス指導については、系統的・継続的な指導が必要であると考え。そこで、各段階における指導内容と到達目標を次のように作成した。

表３ フォニックス指導における指導内容と到達目標

期	Stage	到達目標（【 】は指導内容，〈 〉は指導方法）
Ⅱ期前期	Stage 1 (小学5年)	【アルファベットの各文字の指導】 - アルファベットの名前と音を理解することができる。 - アルファベットの各文字の音を発音することができる。
	Stage 2 (小学6年)	【アルファベット2～3文字の指導】 - アルファベットの各文字の足し算を理解することができる。 - アルファベット2～3文字程度の単語を読むことができる。
Ⅱ期後期	Stage 3 (中学1年)	【4文字以上の音の足し算の指導】 特徴的な文字のつながりやマジック e などを含む英単語を読むことができる。
Ⅲ期	Stage 4 (中学2年)	【Rhyming の要素を取り入れた英文での指導】 文章読解において、英単語の音声を予想して発音することができる。
	Stage 5 (中学3年)	【Rhyming（韻）の要素を取り入れた英文での指導】 文章読解において、新出語の音声を予想して発音することができる。

Ⅱ期においては、文字レベルから単語レベルへ移行していく。Ⅱ期前期においては Zoo phonics を取り入れながら発音指導を実施する。Ⅱ期後期においては、発音指導から音読筆写へ移行しながら、文字と音のつながりにより着目できるように工夫する。Ⅲ期においては、Rhyming（韻）の要素を取り入れた英文の音読練習を繰り返し実施する。magic-e を取り上げた英文を紹介する。

Thank for your nice advice, I could arrive at the nice bike shop near the fine shrine.

As you know, I like to ride a white bike. Lice like to ride rice, though.

I have pride in the bike ride when I ride a white bike.

このように、英文の中で同じフォニックスを取り入れることで、音に気づかせていく。そしてⅢ期の Stage5 では、英文の中で綴りは違うが同音となるフォニックスを取り入れることで、さらに発展的に指導していく。/ a: /の発音となるフォニックスを取り上げた英文を紹介する。

The first person turned the paper over for the purpose of writing her opinion on it. The second person got the paper from her to learn from what she wrote on the paper. The second person gave the paper to the third person for the purpose of writing her opinion, but she didn't work at all. She just burned the paper using her lighter.

3 中学校卒業時のめざす生徒像に向けた授業仮説

本校英語科が設定する中学校卒業時のめざす生徒像は、初歩的な英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができ、英語に関する知識・技能が深まっており、4技能（話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと）を駆使して、状況や相手に応じて適切に英語を使うことができる生徒である。積極的にコミュニケーションを図ることができるとは、外国の文化や他者と英語でのコミュニケーションを積極的に行う態度があることを指す。

Ⅱ期前期（小学校5，6年生） 〈ことばの体系的知識に気づきを促す指導〉

Ⅱ期前期では音声面を中心とした表現（会話）練習を継続して行いながら、母語と外国語の比較、具体的には発音の違い、状況に応じた表現の違いなどの「ことばへの気づき」を促す指導を行う。音声面では例外のないアルファベット1～3文字程度のフォニックス指導を中心とし、ことばの体系的知識に気づかせる指導を入れていく必要があると考えている。具体的には5年生で Zoo phonics によるジェスチャーと文字・音のつながりの指導やチャンツを利用した発音練習の繰り返し指導をする。そして5年生から継続して Zoo phonics によるアルファベット各文字の指導と b+a+t= bat のように各アルファベットの音を足してできる音声を把握できる指導をする。文法のようなことばの体系的知識の学習は中学校に入ってからとなるが、小学校ではフォニックス指導において体系的知識を学習する活動、英語の歌の歌詞を読み解く活動や辞書を引いて自分で単語を見つけ会話に使用する活動を少しずつ取り入れていく。このような指導を行うことにより、経験・体験と理解をつないだり、言語知識を使って語句を読んだりする学習をさせることができるのではないかな。

Ⅱ期後期（中学校1年生） 〈ことばの体系的知識への理解を促す指導〉

Ⅱ期後期においてことばの体系的知識を理解するとは、小学校で気づいたことばに関する知識を自分で見つけたり説明したり、また状況に応じた表現などをその知識を用いて理解することである。具体的な指導に関しては、フォニックス指導をさらに充実させ、長い単語でも音の足し算を自分でできるように指導する。また、不規則な発音についても体系的な知識を学習することで、読むことや書くことへの「足場づくり」になると考えている。フォニックス指導を充実させることにより、読むことはもちろんのこと書くことに関する意欲にも関係するのではないかと考える。また単語を書く際には、音読筆写の手法を取り入れることにより、生徒が認識している音と文字とをスムーズに一致させることができるようにする。そして文法に関しては、状況に応じてどのような英語表現を使えばいいのかを考えさせる活動を取り入れる。言語の使用場面や機能をインプットから生徒が見つけ出し、自分の言葉で説明できるようになるための指導が、Ⅲ期での文法学習に関する「足場づくり」になると考えている。これらの活動を繰り返し行うことにより、小学校段階において体系的に理解できなかった英語表現の文法に関する知識が整理され、英語をわかって使えるようになる基盤となるのではないかと考える。

Ⅲ期（中学校2，3年生） 〈ことばの体系的知識を理解し状況の中で使う時期〉

Ⅲ期では、生徒自身が獲得している英語に関する知識を文脈の中で適切に活用することをめざしている。英語科における「生活知」とは、日常的に話したり書いたりして使用している英語表現の知識であり、「科学知」とは学校で学習する言語の機能に関する知識のことと捉える。体系的知識を獲得させる指導

(発音や文法など)を行うことにより、数多くある英語表現の中から、どの場面でどの表現を使うことが適切なのかを考えさせることができる。Ⅲ期では、実際の場面とそこで使われる英語表現との関連を特に意識して、生徒に表現と場面・状況の関連性に気づかせ、その考えを基に適切に英語表現を活用する(話す・書く)ことができるような指導を行う。英語表現を文脈の中で分析的に見ることを通して、状況や場面に応じた適切な表現を学習し、そして練習することが日常使用している英語知識(生活知)と英語の機能に関する知識(科学知)の「のぼりおり」につながるのではないかと考えている。また、音声指導においては、韻の要素を取り入れたフォニックス学習材を活用して、英単語1語のフォニックスに焦点を当てる指導から、英文の中から、共通のフォニックス(文字のつながり、同様の音)を見つけ出し、音読練習を繰り返し、文字への気づきを促す指導をする。

Ⅱ 本年度の研究計画

1 研究の目的

道案内を通して、命令文と助動詞の指導について小・中学校の学びのつながる授業のあり方を探る。

2 研究の方法

- (1) 文法や語彙の理解に焦点を当てた指導においては、道案内に関する各学年の到達目標(表2)と授業仮説を設定する。
- (2) フォニックスを活用した音声指導において、Ⅱ期とⅢ期における到達目標(表3)と系統的な指導方法のモデルを提案する。
- (3) 以下の授業を実施し、(1)について授業仮説を検証する。

①Ⅱ期前期(小学校5, 6年生)

【授業仮説】

- ・命令文や助動詞 can を繰り返し用いて道案内の練習をすることで、命令文と助動詞 can の文型に気づくことができるのではないだろうか。

【検証方法】

- ・ALT との道案内の対話を通して、命令文と助動詞 can の文型を適切に使用しているかどうかをとらえ、ループリックを用いて検証する。

②Ⅱ期後期(中学校1年生)

【授業仮説】

- ・日本語と英語の命令文の意味に着目し、命令だけでなく依頼のニュアンスがあることを知ることで、命令文を使用できる場面に広がりを持てるようになり、使用場面で表現を取捨選択できるようになる素地を養えるのではないだろうか。
- ・助動詞 can と may の比較を通して、Can I ...?に含まれるニュアンスをとらえることで、助動詞 can を様々な使用場面で適切に用いるための素地が養えるのではないだろうか。

【検証方法】

- ・ALT と道案内の対話を通して、命令文と助動詞 can の使用している様子をとらえ、ループリックを用いて検証する。

③Ⅲ期(中学校2, 3年生)

【授業仮説】

- ・助動詞 should や I think を用いた発話の機能を意識させることにより、使用場面に応じて、さまざまな英語表現を適切に用いることができるようになるのではないだろうか。

【検証方法】

- ・ALT との道案内の対話を通して、命令文や助動詞を使用している様子をとらえ、ループリックを用いて検証する。